

NPO

弘前市

その一言で、 村の人たちが全てを受け入れてくれるようになった。

渋谷 拓弥 NPO 法人 ECO リパブリック白神

取材日 2012.08.23

世界自然遺産白神山地とそれを取り囲む地域住民に対し、環境教育やその他の環境に関する事業を行い、未来を担う子どもたちのために美しい自然を愛でる心を伝えていくことを目的として設立された。震災後は地理的な条件などから岩手県の野田村を集中的に支援し、結果的に他の行政や支援団体の重複した支援を防ぐことにもつながった。

3月11日 14時46分

事務所では大きな揺れが長い時間続き、その直後停電になった。いつものよくある停電で、夕方までには復旧するだろうと思っていたが、一向に復旧する気配がなかった。団地でキャンドルナイトイベントを実施していたこともあり、キャンドルの在庫を放送局へ届けた。信号が機能せず道路は車で渋滞していた。コンビニやホームセンターでは食料や乾電池などを電卓で計算して売っていた。ガスや水道はところどころ止まっている箇所があった。

友人たちが私たち夫婦のために、翌日に結婚披露のパーティーを計画してくれていたが、ホテル側から停電で冷蔵庫が使えず食料の確保ができないので延期して欲しいと、夜になってようやく連絡が来た。

停電は翌日の昼には主要な所から回復していった。同時にいろいろな情報が入り、大変な事態になっていることを知った。

以前からマルシェを行なっていたつながりから、震災直後に農家さんに連絡して街中に市を開いてもらい、市民からはとても喜ばれた。一番困ったのはガソリン不足で、給油のため行列に並んだ。選挙活動も各候補者は車ではなく自転車で活動していた。物理的な被害は少なかったが、経済的な部分では影響を受けた。

緊急行動を考えるフォーラム開催

Facebookなどで情報が飛び交っていた。放射能対策には納豆を食べると良いとか、子どもたちを被曝させないようにするにはどうしたらよいか、風向きなども毎日テレビを見ながら入念に情報をチェックした。青森には六ヶ所村がある。他人事ではない気がした。

原発事故を懸念して2011年4月3日にフォーラムを開いた。弘前大学の非常勤講師で、チェルノブイリ事故当時スウェーデンにいたヒューゴソン・アルヴァルさんに講演を依頼した。200名を



超える人が集まった。弘前大学医学部の放射線科が開催したシンポジウムにも多くの人が集まり、市民の関心の高さが伺えた。なかには「不安を煽っている」との声もあったが、最悪の場合を想定した形で動くという哲学の下に開催した。不安を煽る側面もあったかもしれないが、本当に危ない時に中途半端に安心感を持たせてもいけないだろうという思いがあった。

野田村での支援活動

弘前市に「やわらかネット」という交通事業者や宿泊業者、NPOなどで構成されるゆるやかな連合体があり、週に1回程度地域振興のための話し合いを行なっている。3月23日の会合に、当時弘前大学の山下祐介准教授から私と白神山地ガイド「エコ・遊」代表の土岐司さんに参加要請があり、被災地の支援について他の参加者も交えて話し合った。山下先生から壊滅的な被害を受けた市町村の中でも岩手県野田村という地域への支援が最も遅れるだろうと話があった。野田村は人口4千人のうち約1割が被災していた。長期の支援を考えた時に、弘前市の都市規模と日帰りできる地理的な条件などから継続的に支援していくことを決めた。

翌日、やわらかネットでの支援に対する機運の高まりもあり、事務局的な役割としての私と、土岐さんと、全国の防災の情報を持っている山下先生の3人が集まりスタートした。3月25日に「津軽衆有志野田村支援隊」として初めて野田村に支援に入った。

状況を精査したところ行政も被災していた。行政への支援も必要と考え、協力要請のために弘前市長を訪ねた。なぜ野田村なのか理由を問われ、日帰りが可能である地理的なこと、津軽の殿様の先祖の出身地である歴史的な背景を伝え、恩返しをしようと了解を得た。

民間の支援が先に進み、その後から行政が後方支援に入ってくれた。弘前市も人を派遣し、3名の職員を現地に常駐させてくれた。大学のボランティアも積極的に参加し、支援を行なった。おそらく瓦礫の撤去は日本で一番早かったと思う。弘前市が野田村を集中的に支援するという情報が周囲に伝わることで、他の行政や支援団体の重複した支援を防ぐことにもつながった。

支援の中では「食ベニケーション」というコンセプトのもと、一方通行の支援ではなくお話を聞きながら一緒にご飯を食べて、被災者の方たちが求めているニーズを拾っていくようにした。

避難所や仮設住宅での不自由な生活から離れリフレッシュしていただこうと、4月末の弘前市の桜祭りに合わせて野田村の被災者の方々を招待する計画をたてた。現地へ行く支援から来てもらう支援へと、新しい支援の形が生まれたタイミングだった。現地の支援リーダーの方など、何らかの理由がないと地域を離れられない方々にも来ていただいた。現在でも四大祭りにはお声がけして来てもらう支援を継続している。

受け入れてくれた瞬間

被災地を目の当たりにした時、この町が復興する時にもう一度ここに帰ってくるだろうか、ここにもう一度町を作ろうと思うのかと考えた。地元では環境活動を通じて、どのように地域を再生していくかを普段から考えている。大津波によって町ごと流されてしまった時に、どこかに移り住もうと考えるのか、日本人だったらまたここに同じ文化を作るのだろうか、複雑な思いが交錯した。手前味噌になるが、ECOリパブリック白神が事務局として情報を一元管理することで、民間団体、大学、行政のつなぎ役として機能し、円滑な支援活動ができたと思っている。私たちが支援のため野田村に入った際、受け入れられるまでには時間がかかった。状況が一転した一言が、今でも印象

に残っている。

現地の人たちに「なぜうちに来たんだ？」と問われ、野田村支援隊長の土岐さんはこう言った。「来たくて来たんだ」

その一言で、村の人たちが全てを受け入れてくれるようになった。今でも鮮烈に覚えている。

今後の課題

継続的に支援していくための費用の問題がある。支援活動を始めた頃にいただいた寄付金や義捐金は底をついてきている。経済活動をどう再生していくかという点も課題だ。支援に関しても物質面だけでなく心の交流にシフトしていきたい。また、たくさんの支援の中でできたコミュニティを残し、現地の人たちの言葉を拾いながらアーカイブ化をしたいと考えている。

震災を振り返って

被災地にはいろいろな産業や文化や信仰があり知恵があった。それが今回の震災でことごとく破壊された。再生していく時にはそれぞれの地域の特色を活かして欲しいと思う。すべてが同じような町になってしまったら絶対につまらない。どこの駅に降り立っても同じ景色や町並みがあることは、日本の文化ではない。里山のような自然環境と共生してきた背景があるからこそ、それぞれの特色があって面白いのだと思う。今後の再生にあたって絶対に残して欲しい。再生可能エネルギーを活用し、古き良き町を再生させることができれば、大震災から復興した日本の姿として、世界に向けて発信していけるだろう。



撮影：2011.4.3 青森県弘前市「緊急行動！津軽からがんばろう日本!! 震災復興支援フォーラム」パネルディスカッション